



天上人の宴  
第七話



殺露栖星の怪  
(2)

yae-mon



ストレッチャーごと運ばれた先は、緑の苔の一面に  
生えたような広場で、しかも公衆の面前だった。  
公衆といっても、みんなカエルのような顔だちをしている。  
そうか、ここは進化の過程で、こうした形態へと変化したのであろう。

ひょうきんな、それはひょうきんな風貌であり、  
彼らにも年齢、性別があるには違いないが、  
まったく私には区別がつかないのだ。  
ただ、大小があって、それだけは大人と  
子供の差であろうかと思われた。

それより、見上げる空が異様に赤みを帯びている。  
赤紫色なのだ。私は大気の相違に、  
また呼吸できないという強迫観念に捕らわれかけた。

私：「はあはあ、ぜいぜい」

ティッシュ：「ネアン、どうしたの？」

ティッシュがすぐ隣にいた。その声におマールもやってきた。

私：「この大気は僕には合わないかも知れない」

オマール：「そんなことはない。  
君は薄膜でちゃんと覆われているじゃないか」

そう言われれば、私はまだ半透明の、光の加減によって  
玉虫色に変化する膜に覆われている。

オマール：「その薄膜は、君の体の要求する環境に  
自動的に整えるものだ。  
絶えず薄膜を通して、この星の大気と元素交換が  
なされているから、大丈夫のはずなんだが」

そう言われてみれば、特に苦しくはない。  
気にしすぎなのだ。

一時的にもあわてふためいたためか、  
公衆の目が一斉に注がれていた。  
私は横になったまま彼らを眺めまわしたが、  
彼らも一様に、私を覗き込んでいた。

私の横には、ティッシュやベンザがいたが、  
よほど私は珍しい奴であったに違いなく、  
サファリパークで、孤独にも野生に監視される  
見物客のようだった。  
だが、恥ずかしいという気が起きなかったのは、  
彼らを下等動物と見る先入観のせいだろうか。

先に行ったオマールが、向こうの  
お偉がたと思われる人？物と、  
身振り手ぶりを交えながら、何か話しをしている。  
2人が互いに抱き合ったときに、  
周りから歓声のどよめき起きたので、  
親善ムードが高まりつつあるのは間違いなかつただろう。

オマールは2女性を手招きで呼んだ。  
すると、よせばいいのにティッシュは私の寝台も、

共に押していくのである。

お偉がた（総理大臣）：「お二人はこちらへどうぞ。  
こちらは、地球人のかたとか。  
具合が良くないとのことなので、  
病院のほうに御案内しましょう」

さすが、コルゲンさん、肋骨を治しに連れて行って  
くれそうだったのはいささか早計だったか。

ベンザ：「いいえ、この人は私たちの  
目の届くところに居させてください。  
治療法は私たちが良く知っていますから」

オマール：「しかし、そんな身勝手をしている場合じゃないぞ」

ティシュ：「いいえ。絶対にだめよ」

総理大臣：「よろしいではありませんか。  
会場はあすこですから、地球の方を貴方様がたの  
目の届く一番近い特等席におつけしましょう」

見れば、そこは小高い丘のように円形に  
盛りあがっていて、かなり大勢の人が  
秩序整然と周囲を取り巻いていた。  
お見合いは、その丘の上で、衆目の中で行われるのだ。  
すでに、お見合いの相手らしきカエルたちが、  
礼服姿で丘の上を歩きまわっていた。

まるで、大相撲かプロレスの試合みたいじゃないか。  
所変われば品変わるである。もしかしたら、  
この上で実際にタッグマッチでも始まるかと思われた。

私は、寝台ごと、土俵ならぬ丘のかぶりつきの  
貴賓席らしき並びに置かれた。  
左隣には、きちんと礼服で正装した  
穏やかな表情のカエルさんが座っていた。

私がちらっとそちらを見ると、向こうも私のほうを向いた。

正装のカエルさん（接待大臣）：「あなたはどこから来られたのかな。  
スーリア星？それとも、アイアガイ星？」

私：「地球です」

接待大臣：「え？そうなのかね」

私：「御存じですか」

接待大臣：「ああ。噂には聞いてるよ」

その時、私の右隣に居た白い服を  
着たカエルさんが話してきた。

白い服のカエルさん（接待大臣夫人）：「地球なんですか？  
そこって大変なんですよ？  
それでそんな風な病気になられたの？」

私：「いえ、これはちょっとした船酔いです」

接待大臣夫人：「あらそう。じゃあ、あなたの星での生活のせいじゃないのね」

私：「私の星での生活が何かしましたか？」

接待大臣夫人：「あ、そう。違うのね。とすると、あなたは政府のお役人かしら」

私：「いえ。私はお役人なんかじゃなく、一般人ですよ。  
一般人が健康じゃあ、いけませんか」

接待大臣夫人：「あらー。噂では、みんな  
ボロ雑巾のようになっているってことだけど」

私：「そんなことはないっすよ。  
誰がそんな噂を立ててるんですか。  
未だに我々のことをちょんまげスタイルだとでも

思ってるんじゃないでしょね」

**接待大臣夫人：**「チョンマゲ?? そんなのは知らないけど、あっちにいる外務大臣から聞いたものだから、てっきり正しい情報かと思ってたわ」

外務大臣と言えば、お偉いさんだ。  
そうか、ここは星間交渉の場なのだ。

**私：**「とすると、ここは、皆さん政府のかたですか？」

**接待大臣夫人：**「この最前列は、みんな大臣ですよ。  
ほら、あそこに居るのが総理大臣。隣が奥さん。  
その横には宇宙連邦代表の夫妻もいる。  
私の主人は渉外大臣。  
ほら、あなたがおしゃべりしていたのがそうなの」

成り行きとはいえ、偉いところに運ばれてきたものだ。  
もし日本では、たとえごめん被りたくても、  
一生こんな栄誉ある場所に置かれることはあるまいに。  
と、左を見やると、呼応するように  
紳士ガエルさんは顔を向けた。

**接待大臣：**「私は渉外大臣とは言うけれど、至って閑職でね、  
星間要人の夜間の接待だけを仕事にしているんだよ。  
接待大臣とも言われている」

**私：**「それだけのお仕事ですか」

**接待大臣：**「そうだ。私邸が立派なもので、  
迎賓館として利用していただくことになっている。  
何の知識もいらん。  
ほとんどの星の料理をマスターした料理人が  
いざとなればいつでもやってくる。  
私は、ただ星々の間で起こる  
とりとめもない四方山話をして、お客さんをくつろがせる。  
それが私の仕事のすべてなんだ」

私：「地球のあられもない噂が立っているようですが、訂正願えませんか。我々がボロ雑巾だなんて、時代錯誤もいいところですよ」

接待大臣：「私はそんなことはしらん。他の大臣がしているような話は、私には何の興味もない。私はただ、お客さんが大いに楽しんでくれる、それだけでいいんだ」

私：「そんなー。僕は、そういう噂話の真偽を明らかにすることに楽しみを感じるんです。れっきとした客としての楽しみなんです」

接待大臣：「こりゃ、変わった人だ。そんな客人は初めてだ。みんな精一杯ハメを外して楽しむというのに」カエル紳士は、目をパチクリさせた。

そうしているうちに、土俵上では、オマール兄妹と相手方の男性や世話役がそれぞれの席につき、タキシードを着たカエルの司会が第一声を上げたのだった。

司会者：「ただ今より、お見合いの儀、取り行わせていただきます。えー、このたびは、サテュロス星より、我がジーゼット星に興し入れ願うという、歴史的に初めてのめでたきお見合いの儀でございまして、今後両星の友好と親善に欠くべからざる交流のさきがけになるものと・・・」どこでも似たような祝辞の挨拶とはなった。

ところが、その後が奇妙なのだ。ティッシュとベンザの座る前にテーブルが置かれ、その向こうに向かい合うように新郎候補が座った。その両脇に互いの星の仲人や世話役が座って、両陣営が互いに質問をぶつけ合うのである。

それは一対一でなされており、時には3組も4組もがやがやと話を飛ばし合って、何がどうなっているやら、聞き手には不明瞭窮まりなかった。

ただ、土俵の上方に、赤から緑にまで色彩変化する30センチ四方くらいのパネルが、それぞれの人に対応するようにぶら下がっていて、言葉のやり取りのつど変化するのだ。右隣の大臣の奥方は、それをじっと見ながらやり取りに傾倒している。

私は、「何を言い合ってるのか分かります？」と左の旦那の方に聞くと、

**接待大臣：**「私にはわからんよ。話をまとめようとしていることは明らかだろうがね」

それを聞いて一安心。どうやら聖徳太子みたいな連中ではないらしい。

**私：**「上にある光るパネルは何ですか？」

**接待大臣：**「そうか。君は知らなかったんだな。あれは心の中のイエス、ノーやその他の感情を表示する装置だ。あれによって、互いの好悪の感情を知ることができる。どこかの後進星のように、言葉と思いが食い違うことがないために、話が相手の納得度と好感度を高めることだけに費やされて、手っ取り早く済んでしまうし、後々のトラブルが少なくて済むんだ」

なるほど、腹のさぐり合いとか根回しなどといった面倒な過程が省けるということか。

**接待大臣：**「緑になれば、うち解けた証拠なんだ。だが・・・」



見れば、ほとんどの人のパネルが黄色か緑なのに、  
ティッシュのパネルだけはどんどん赤の深みを増している。

場内の観客同士も、そのことについて  
あれこれ話し始めるようになり、ざわついてきた。  
その喧噪の間に、私もさっきの話に決着を付けたいと思った。

私：「地球人が誤解を受けている件ですが・・・  
聞いていいですか」

接待大臣：「愚妻の言ったことをいちいち気にしちゃいかんよ」

私：「いや、奥さんの考えは、  
連邦が地球をどう思っているかの裏返しでしょ？  
僕は、一般的に地球がどう思われているのか  
知りたいんです」

接待大臣：「地球が苦労性の星なのは、仕方ない部分もあるんだよ」

私：「ということは、やはり・・・。  
その、仕方ないとは、どんな事情があるというんでしょう」

接待大臣：「連邦加盟星はどこも平和だ。  
その平和は、構成する者みなで維持していくものだ。  
構成者が平和を愛好する者ばかりであれば、  
平和が維持されるばかりか発展すらしていくものだ」

私：「確かに、地球には平和愛好家は居ても、  
そうでない者も居ますね。  
その彼らが引っかき回している感じはあります。  
でも、そうした者も生活環境や生き立ちが  
良くないために必然的に発生して来るんだから、  
仕方ないですね。ここは、そんなことはないんですか？」

接待大臣：「昔はあったんだよ。が、今はほとんどないな。  
それは生活環境が良くなったこともあるが、

最大の理由は、構成員を精選してきたからなんだ」

私：「精選とは？」

接待大臣：「精神の資質によってだ。

我々の星も、はじめ君らのような世界が広がっていた。

そこに革命が起きたのは、

心理を検出することのできる観測器の発明によってだった。

初めの頃、心の中が誰の目にもあからさまになることを

恐れた者たちの多くの抵抗運動があったが、

やがて収束したとき、あらゆる者の精神状態が

飛躍的に向上したのだよ。

心と言動の一致しない詐欺師は姿を消し、

心の赴くままを素直に行動に移せて、

なお恥じることはなくなった。

互いが互いの心の内を見合って、

寛容さと信頼関係が一気に花開いたんだ」

私：「僕の星だったら、プライバシー侵害で  
大問題になりますね」

接待大臣：「その反対運動家というのが、

およそ詐欺師で占められていたのは皮肉だった。

だが、潮流には勝てず、

およそが悔いて心を恥じないものにした。

しかし、中には難しい者も居て、好戦的な者、

制圧的な者、偏執的過ぎる者、独善過ぎる者、殻を閉ざす者、

いつまでも2枚舌を使う者は、周りから疎外され孤立して、

やがてどこかへ去っていったんだ」

私：「どこへ去ったんですか？」

接待大臣：「魂の輪廻の果て、

この星では自己実現を図ろうとして果たせないから、

それに相応しい環境の星に去ったんだ」

私：「もしかして、地球？」

接待大臣：「それ以外にも幾つかの星にな。  
時によっては、連邦が場所を斡旋して、  
用意した船で大挙して連れていったこともある」

私：「連邦までが？だったら、  
地球は平和な星に永久になれないかも知れませんよ」

接待大臣：「どうして」

私：「だって、そんな問題児ばかり送り込まれていては、  
質が向上するわけじゃないですか」

接待大臣：「荒くれ者達は、互いに摩擦しあって、  
やがて角が取れて丸くなると聞いているんだがね」

私：「川の中の石ころじゃあるまいし。  
今地球は、公害と産業廃棄物の山が処理しきれず、  
今にも駄目になりかかっているんですよ。  
それと同じことですよ」

接待大臣：「そうなのかね。オーバーワークになっているのか。  
そのこと、連邦は知ってるのかな」

私：「あなたから聞いてみて下さいよ。  
連邦代表も来てるんでしょ？」

接待大臣：「あいにく、私は何にも専務大臣だから・・・」

私：「ギャグでごまかさないで下さい」

接待大臣：「分かったよ。晚餐会の時、それとなく聞いてみよう」

私：「それとなく、じゃなく、真剣に」

接待大臣：「はいはい。約束しよう」

その頃、土俵上では、いよいよティッシュが、  
パネルを真っ赤に染めていた。  
ついに黄緑色に変じたベンザまでもが、  
ティッシュと新郎候補との仲を取り持とうと、  
話に加わっていた。オマールはついに怒りだし、  
周りがそれをなだめ、止めようとする。

パネルだけ見ていると、みんなの感情のうねりと激変を  
物語ってか、まるでパチンコ屋のネオンサインであった。

その時、ティッシュが突然座を外して、土俵を降りると、  
私のところに駆け寄ってきたのだ。  
それは、勇み足ではないのか。

**ティッシュ**：「ネアン。助けて！！」

ドーンと、私の寝台に飛び乗るや、しがみついてきたのだ。  
さながら場外乱闘。  
ボキボキッ、バキッ。

**私**：「ギャーア」

恐らく、肋骨は全て、腕や鎖骨その他多数が  
折れたことであろう。激しい痛みで薄れゆく意識の中、  
次のような言葉を聞いた。

**ティッシュ**：「私はこの人を選びます」

ええっ。当惑する私の心。視界は真っ暗になり、  
ギーン、シュバーー・・・・・。  
ついにジェット音が耳の中にこだまし、  
全ての音はかき消されてしまった。  
どうなるのか、ネアン。